

日進月歩するデジタル製品を、「使い勝手」ではなく、「実装された新技術」と「製品の革新性」をテーマにレビューしていくコーナー。

石井英男

## COOLPIX P1 (ニコン)

### 無線LAN機能を標準搭載することで デジタルカメラがより便利に

#### 無線内蔵で使い勝手が向上

ニコンから登場したCOOLPIX P1は、IEEE 802.11b/g対応無線LAN機能を内蔵したコンパクトデジタルカメラである。ニコンは2004年に、プロ向けデジタル一眼レフカメラ「D2X/D2Hs」対応の無線LANアダプター「WT-2」を発売しているが、コンシューマー向けのコンパクトデジタルカメラで無線LAN機能を標準搭載したのは、COOLPIX P1が世界初となる。

COOLPIX P1ではWT-2と同様に、画像の転送プロトコルとして、米FotoNationが開発した「PTP/IP」(Picture Transfer Protocol over Internet Protocol)を採用していることが特徴だ。PTP/IPは、デジタルカメラとPCをUSB接続する際に使われているプロトコルのPTP(Picture Transfer Protocol)をIPベースに拡張した規格である。ニコンが2003年に発売したデジタル無線LANアダプター「WT-1」ではプロトコルにFTPを採用していたため、転送先のPC側にFTPサーバーを構築する必要があった。しかし、PTP/IP対応のCOOLPIX P1では、そうした準備は一切必要なく、気軽に使えることが利点だ。

#### 無線の速度にはまだ不満あり

COOLPIX P1の無線LAN機能の設定は、付属ユーティリティを利用してPCから行う。このときのみUSBケーブルで接続する必要があるので注意が必要だ。

無線LAN経由での転送モードは、「単転送」「撮影日転送」「転送マーク画像転送」「選択画像転送」「撮影&転送」「PCモード」「ワイヤレスプリント」の7種類が用意されている。このうち撮影時に利用できるのが、撮影&転送だ。これは、1枚写真を撮るたびに自動的に無線LAN経由でPCにそのデータを送ってくれるものだ。ただし、1枚の転送が終わらないと、次の写真を撮影することはできない。

ここで問題になるのがIEEE 802.11b/gの実効通信速度だ。IEEE 802.11bはもちろんIEEE 802.11gでもUSB 2.0に比べれば、まだまだ遅いのだ。試しに802.11g接続時に最高解像度&最高画質(800万画素、FINE)で撮影した写真1枚を転送するのにかかった時間は、約20秒であった。そこで、解像度を300万画素にし、画質もNORMALにしたところ約6秒で転送ができるようになった。つまり、現状の無線LAN規格では、800万画素

クラスのデジタルカメラで撮影した写真を転送するには、まだまだ力不足だ。

#### 連携サービスの登場に期待

COOLPIX P1は、無線を内蔵したことで、いちいちケーブルを接続しなくても画像を転送できることが魅力だ。しかし、せっかく無線を内蔵したのに、用途がPCに画像を転送するだけではもったいない。COOLPIX P1単体で、画像からHTMLファイルを作成してウェブサーバーにアップロードを行ったり、オンラインアルバムサービスに直接接続できれば、旅先で撮影した写真をすぐに公開できるし、メール機能を装備していれば、遠く離れた海外から、自宅にいる家族に現地で撮影した写真付きメールを送ることもできるわけだ。実は、無線LAN内蔵ではないが、2000年9月にリコーから登場した「RDC-i700」では、こうした機能をすでに実現していた(通信には、CFタイプのPHSカードなどを利用)。

正直な感想では、プロカメラマン向けなどの特定用途以外で無線LAN機能がデジタルカメラ界のトレンドとなる可能性は低い。差別化の1つとしては有効な手だろう。次世代無線LAN規格IEEE 802.11nでは、実効速度で100Mbpsを超える見込みなので、こうした技術が搭載されてくれば、もっと使い勝手は向上するだろう。現状の仕様やサービス、アプリケーションの準備状況では、過渡期の製品と言わざるを得ないが、今後の発展に期待したい。

## [ Reviewer's View ]

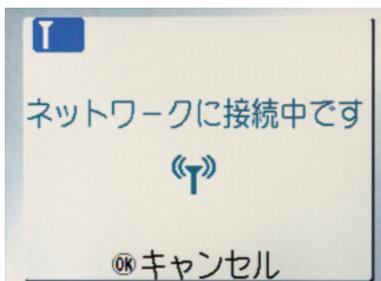
コンパクトデジタルカメラの高画素化競争も行き着くところまで来てしまい、手ぶれ補正や高感度、防水機能などの付加価値で差別化ようになってきた。COOLPIX P1の無線LAN機能内蔵も、そうした差別化の1つの方向であり、PTP/IPの採用によって、PC側で操作を行わずに画像を転送できるのは確かに便利だ。しかし、現状のIEEE 802.11gでは、USB 2.0に比べて転送速度が遅く、最高解像度・最高画質で撮影した画像を転送するにはかなり時間がかかるのが残念だ。



デザインはオーソドックスである。グリップ部分が厚くなっているため、ホールド感も良好だ。



2.5型の大型液晶モニターを装備。画面が大きく、表示も鮮やかで見やすい。ボタンの操作性も良好だ。

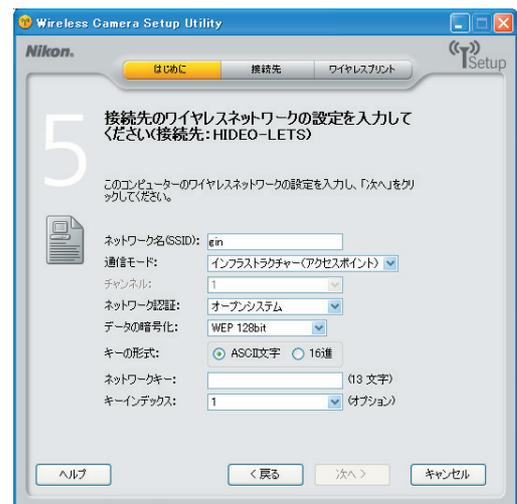


ダイヤルをワイヤレスモードに切り替えると、パソコンから登録した接続先が表示され、接続が始まる。



側面に、無線LANアンテナを搭載。下部には、ワイヤレス転送LEDが用意されており、接続状況を確認できる。

**COOLPIX P1**は、世界で初めて無線LAN機能(IEEE 802.11b/g対応)を内蔵したコンパクトデジタルカメラだ。有効画素数800万画素CCD(1/1.8型)と光学3.5倍ズーム(35mmフィルム換算36~126mm相当)を採用するなど、デジタルカメラとしての基本性能も高い。オプションのワイヤレスプリンターアダプター「PD-10」を利用すれば、PCを介さずに、直接ワイヤレスで印刷を行うことも可能だ。なお、姉妹機として510万画素モデルのCOOLPIX P2も用意されている。



無線LANの設定は、付属のユーティリティソフト「Wireless Camera Setup Utility」を利用して、PC上から行う。

# AIBO ERS-7M3

(ソニースタイル)

## コミュニケーション機能を強化し RSS 配信にも対応した最新 AIBO

### AIBO の 6 年半の の集大成

ソニーが世界初のエンターテインメントロボット AIBO「ERS-110」を発表したのは 1999 年 5 月のことだった。ERS-110 は、日米あわせて 5000 台がネットでのみ販売されたが、日本では発売開始後わずか 20 分で完売してしまうなど、当初から大きな反響があった。その後も AIBO は、次々と新モデルが投入され、デパートなどの店頭でも販売されるようになり、一般の認知度も高くなった。しかし最近はずも落ち着き、販売もソニースタイルでの直販に一本化されるようになった。

今回登場した AIBO「ERS-7M3」は、これまでの AIBO の歴史を集大成したともいえるモデルだ。

ハードウェア面では、カメラやタッチセンサーを全身に備えて人や周囲の環境をきちんと認識する。動作も危なげなく歩行し、子供が多少乱暴に扱っても簡単には壊れることはない。ソフトウェアの面では、多くの動作に関する蓄積が進み、かなり自然でかわいらしい動きをするようになっている。

最新モデルでは人間とのコミュニケーション機能が大幅に強化されたほか、AIBO が写真入りの日記を付ける「AIBO フォトダイアリー」や AIBO の気持ちがわかる「マインドスコープ」、RSS などの新機能も装備し、RSS 配信されるニュースやブログの中身を読み上げることなども可能になった。なお、旧モデルの「ERS-7」や「ERS-7M2」のユーザーでも、アップグ

レードキットを購入すれば、ERS-7M3 と同機能にアップグレードできる。

### RSS に対応し ニュースを読み上げ

ERS-7M3 では、ボイスサウンドが標準搭載されており、言葉による AIBO とのコミュニケーションが簡単にできるようになった。また、語彙も旧モデルでは 200 語だったが、ERS-7M3 では 1000 センテンスの言葉をしゃべるようになった。

たとえば「どうしたの? 」と AIBO に質問すると、「ピンクボール遊びしているの」とか「どうしょっかなー」など、そのときの状況や気分に応じた返事をしてくれる。もちろん、日常の挨拶にもきちんと答えてくれるし、何気ない独り言をいうときもある。モーション(動き)も自然で動物らしさを感じられるので、長時間見ている、飽きることはない。

ERS-7M3 では、PC 上で動作する「AIBO エンターテインメントプレイヤー」もバージョンアップしている。AIBO エンターテインメントプレイヤー Ver.2.0(以下 AEP 2.0)は、AIBO と PC とを無線 LAN 経由で結び、AIBO をより深く楽しむためのソフトである。AEP 2.0 には、AIBO が考えていることがわかる「マインドスコープ」や AIBO が日記を付ける「フォトダイアリー」などの機能が用意されている。新バージョンから新たに RSS 配信にも対応しており、RSS 配信を行っている代表的なニュースサイトが AIBO エンターテインメントプレイヤーに登録されている。登録され

ている RSS サイトは、ニュースやブログ、アイボなど、いくつかのジャンルに分類されており、新たに好きなサイトの RSS を追加することもできる。

PC 側で AEP 2.0 を起動させた状態で、AIBO に向かって「AIBO ニュース読んで」と呼びかけると、「どのジャンルを読み上げますか? 」と AIBO が聞いてくる。たとえば「ブログ読んで」と呼びかければ、ブログのジャンルに登録されているサイトが RSS 配信情報を音声で読み上げてくれるわけだ。

### 「家庭用ロボット」の完成型

この RSS 読み上げ機能が日常的に使えるかどうかという微妙なところだが、最近話題の RSS に対応してきたところなどは、さすがにツボを押さえた作りといえるだろう。ほかにも、登録したスケジュールを読み上げてくれる機能なども用意されている。

このように ERS-7M3 は、現状で実装可能な機能の多くを実現しており、エンターテインメントロボットとしての完成度はさらに向上している。初代 AIBO や第 2 世代 AIBO と比べるとまさに隔世の感がある。

実際に数日 AIBO と暮らしてみた実感としては、思った以上に AIBO が生活に溶け込んだことだ。相手をせずついておいても自律的に動き回っており、気がつくくと独り言をしゃべっていて、思わず頬がゆるんだりする。RSS などによるコミュニケーション機能も、現時点では日常的に活用するには苦しい点もあるが、今後のデジタルホームネットワークにおけるユーザーインターフェイスとしての利用も視野に入れた試みだろう。家庭におけるロボットの 1 つの方向として、かなりの完成度に達している。しかし、一般家庭に普及していくのかというと、やはり価格がネックとなり、まだまだ難しいのが現状だ。ロボットのある生活があたりまえのものになるには、もう少しかかりそうだ。

## [ Reviewer's View ]

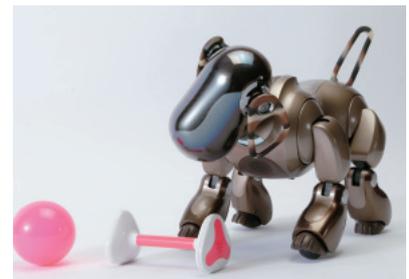
初代 AIBO の登場は大きな話題となったが、それから 6 年が経過し、AIBO ブームもすっかり沈静化してしまった。しかし、その間も AIBO は着々と進化を続けていた。今回登場した ERS-7M3 で、AIBO の目標はほぼ実現できたといえるだろう。RSS 配信への対応なども確かにおもしろいが、やはり AIBO のキモは、動物らしい自律的な動きと人間とのコミュニケーションにある。新 AIBO は、コミュニケーション能力が大きく向上し、より高度なコミュニケーションが楽しめるようになったのだ。



**ERS-7M3** は、自律型エンターテインメントロボット「AIBO」の最新モデルだ。ハードウェア自体は、2003年に発売された ERS-7 や 2004年に発売された ERS-7M2 と同一だが、専用ソフトウェアが「AIBO マインド 3」に、PC 上で動作する「AIBO エンターテインメントプレイヤー」が「Ver.2.0」にバージョンアップするなど、ソフト面で大きく進化している。ボイスサウンドを標準搭載したほか、短期記憶により、対象物の位置を記憶するマッピング技術なども新たに実現した。



腹部のカバーを外すと、バッテリーやメモリースティックのスロットとともにワイヤレス LAN スイッチと音声のボリュームがある。



期間限定で販売される新色のハニーブラウンモデル。従来と同じカラーの「パールブラック」と「パールホワイト」も用意されている。

ピンクボールやアイボーンの位置を覚えておくことが可能になった。位置を質問すると、そちらの方向を向いて指さしてくれる。



RSS 配信されているニュースやブログの内容を読み上げることが可能。インターネットラジオにも対応する。



AIBO が日記を書く「AIBO フォトダイアリー」機能が追加された。このダイアリーは、ワンタッチでブログにアップすることもできる。



## [インターネットマガジン バックナンバーアーカイブ] ご利用上の注意

このPDFファイルは、株式会社インプレスR&D(株式会社インプレスから分割)が1994年～2006年まで発行した月刊誌『インターネットマガジン』の誌面をPDF化し、「インターネットマガジン バックナンバーアーカイブ」として以下のウェブサイト「All-in-One INTERNET magazine 2.0」で公開しているものです。

<http://i.impressRD.jp/bn>

このファイルをご利用いただくにあたり、下記の注意事項を必ずお読みください。

- 記載されている内容(技術解説、URL、団体・企業名、商品名、価格、プレゼント募集、アンケートなど)は発行当時のものです。
- 収録されている内容は著作権法上の保護を受けています。著作権はそれぞれの記事の著作者(執筆者、写真の撮影者、イラストの作成者、編集部など)が保持しています。
- 著作者から許諾が得られなかった著作物は収録されていない場合があります。
- このファイルやその内容を改変したり、商用を目的として再利用することはできません。あくまで個人や企業の非商用利用での閲覧、複製、送信に限られます。
- 収録されている内容を何らかの媒体に引用としてご利用する際は、出典として媒体名および月号、該当ページ番号、発行元(株式会社インプレス R&D)、コピーライトなどの情報をご明記ください。
- オリジナルの雑誌の発行時点では、株式会社インプレス R&D(当時は株式会社インプレス)と著作権者は内容が正確なものであるように最大限に努めましたが、すべての情報が完全に正確であることは保証できません。このファイルの内容に起因する直接のおよび間接的な損害に対して、一切の責任を負いません。お客様個人の責任においてご利用ください。

このファイルに関するお問い合わせ先

**株式会社インプレスR&D**

All-in-One INTERNET magazine 編集部

[im-info@impress.co.jp](mailto:im-info@impress.co.jp)